

## 「石巻での医療支援活動に参加して」

藤原克彦

震災直後の3月20日兵庫県医師会代議員会に参加した私は、兵庫県医師会医療支援チームの先発隊としてすでに宮城県で活動された先生方の報告を聞いて現地の被害の大きさと医療事情の悪さに驚き、私でも何かお役にたてることがないかと思いました。その報告のあと県医師会が医療支援チームの参加者を募ることを公表されましたので、後日応募したところ希望が叶うことになりました。

出発日の4月14日は朝5時半に自宅を出発、当時仙台空港が閉鎖中であったため、山形空港経由で宮城県石巻市に入りました。今回同じチームで参加された4名の先生方とはどなたも初対面でしたが、行きの車中で会話が弾むうちに次第に仲間意識が生じました。車内から初めて自分の目でみた被災地の変わり果てた様子は驚きの連続でした。そして午後1時すぎに避難所となっている石巻中学校内の救護所に到着しました。救護所といっても、教室を仕切って待合室と2か所の診察場と医療物資の倉庫に仕立てただけのものでした。そこが兵庫県から派遣された医療支援チームの根拠地で、私の所属した第12班は医師5名、看護師5名（2名は地元の方）、薬剤師2名、事務職員2名の編成で、5か所の避難所に避難されている1,037名の診療にあたりました。マスコミでも報道されているように避難所の環境は劣悪で、4月中旬とは言え東北地方ではまだ寒いのに暖房はなく、仕切りも不十分でプライバシーの配慮もないに等しい状態でした。インフルエンザの流行期が過ぎていたことがせめてもの幸いでした。この時期には避難所に乳幼児を抱えるご家族はかなり減少し、小児科医の活動する場は限られたものでした。その夜の宿泊は仙台のホテルで、翌朝6時にホテルを出発し2時間半かけて石巻中学校に出かけました。朝のミーティングの後、リーダーの指示に従い2か所の避難所に分かれて午前3時間と午後2時間の診療を行いました。リーダーの方は毎夕石巻赤十字病院に行き、市内全避難所の連絡会議に参加されました。後日テレビ報道で知ったことですが、石巻日赤の石井正医師がこの地区の災害医療コーディネーターとしてこの会議のまとめ役を果たされ、医療のみならず市民生活のあらゆる面における回復に大きな力を発揮されたようです。私の活動はわずか2泊3日で、往復に半日ずつかかったため、正味の活動は2日間だけでした。私の診療した患者数は29名でそのほとんどは内科の投薬の方で、小児科の患者は3名のみでした。しかしあるご両親は小児科医が不足していたため別の避難所からわざわざ来られ、私としてもやはり参加してよかったと改めて実感できました。

帰宅後記憶の薄れないうちに、この活動に関する感想を自分なりに整理しました。その内の幾つかを最後に述べたいと思います。まず医療機関として唯一生き残った石巻赤十字病院が後送病

院としてのみならず、医療連携の司令塔として災害医療の復興に大きな役割を果たした事は、全国の医療従事者にとり学ぶべき点が多いと思いました。災害を想定して医療機関を地理的に分散させ、あらゆる点で災害に向けて周到な準備がなされていた事実を先日の吉訓記念講演会で飯沼一宇石巻赤十字病院長から伺い、感銘を受けました。もう一点はスタッフどうしが同じ兵庫県という繋がりを感じ、スムーズにチーム医療ができたことです。特に関西弁で会話できる気楽さを意識しました。東北地方の方々にとっても、なまで聴く関西弁の会話がまるで漫才のように聞こえて、診療の場がなごんだと参加者のどなたかが話していました。

今回の活動でどれだけ被災地の方々のお役にたてたか解りませんが、私にとっては医療の原点に立ち返って考えさせられるよい機会となり、得るところの多い貴重な経験でした。

（現地で撮った写真は「藤原小児科クリニック」のホームページに掲載しております。